

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131085	学校法人名	法政大学		
大学名	法政大学				
事業名	江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	25,715人
参画組織	国際日本学研究所、エコ地域デザイン研究センター、文学部、デザイン工学部、法学部、経済学部、社会学部、国際文化学部、人間環境学部、現代福祉学部、キャリアデザイン学部、理工学部				
事業概要	江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出す。その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点（仮称）「江戸東京研究センター」を設立し、日本文化の国際的発信者としての法政大学のブランドイメージを確立し展開する。				
	<p>本事業の目的は、地球社会の課題解決に向けた知の創出と自立的な市民の育成によって世界の持続可能性に貢献することを謳う〈法政大学憲章〉に則り、持続可能な社会（都市）のあり方を、江戸東京モデルに、学際的な研究体制のもとで国際的な視座・視点も加えながら探究することである。循環型都市、持続可能な発展を実現してきた都市として世界的に再評価される江戸東京は、地球環境問題、産業構造の変化、グローバリゼーションの浸透に抗する地域の自立、成熟社会における質の高い個性豊かな社会の発展などへの対応が世界的に強く求められている現代において、様々な課題解決の可能性を持つ重要な研究対象となりうる。</p> <p>本学には江戸東京に関する幅広い領域からの膨大な研究蓄積がある。エコ地域デザイン研究センターは、国際比較の視点からこの都市の特質を研究し、「水都」としての側面や、エコロジカルな都市としての側面について学際的研究を積み上げてきた。田中優子総長も所属する国際日本学研究所は、国際的共同研究の積み重ねにより外からの眼差しで江戸を含む日本文化の新しい分析を可能にしてきた。この理系と文系という、相互に性格を異にする二つの研究機関が共同してより学際性を高め、大学をあげて本事業を推進する。</p> <p>江戸東京に関する研究としては、1980年代に小木新造・陣内秀信によって提唱された「江戸東京学」がある。近代化＝西洋化を徹底して押し進め過去と断絶したかに見える東京の中に、江戸の歴史に裏打ちされた個性豊かな都市空間や多彩な文化的アイデンティティを発見し、江戸東京博物館の開館など成熟期に入った我が国の社会の要請に応える大きな貢献をした。本事業では、その後の本学研究機関の実績をもふまえて、現代にふさわしい形で江戸東京研究を大きく発展・深化させ、その成果を世界に発信することを目指す。</p> <p>その新たな方向性の柱の一つは〈近世＝江戸〉と〈近代＝東京〉の繋がり（連続性と断絶性）を見るという江戸東京学の発想を越えて古代にまで遡り、深層にまで掘り下げてそのユニークさの根源を見極めていくという点にある。そのことは即ち、江戸市域（現在の東京の都心部）に限定せずに武蔵野、多摩、つまり都市江戸の発展・繁栄を支えた自然豊かな後背地、あるいは田園や近郊農村だった広い地域（テリトリーオ）へと考察の対象を広げる戦略に繋がる。江戸がいかに巨大都市として発展し、現代の東京に変貌していったかを考えるには、その前提条件としての自然環境や江戸前史を理解しなければならない。これは本学を構成する各キャンパスの立地とも重なり、3キャンパス連携を謳う本学教育ビジョンを推進する原点となる。</p> <p>もう一つの重要な柱は、江戸東京学が謳われた1980年代にはまだ顕在化しておらず、それ以後に東京という都市を特徴づけた独特の諸現象について、現代的な視点から考究するという点である。東京のユニークさ、独自のポテンシャルティが生まれるメカニズムを解明するという課題である。これは持続可能な地域社会の構築やユニークな研究拠点の発展、〈実践知〉の具体化を目指す本学研究ビジョンの核心に位置する。</p> <p>この2点を新たな柱として、東京が現代まで文化的にも空間的にも持続的な発展を続け、いっそう世界に向けて個性を発揮し始めた秘密を学際的に解明することを目的として以下の4つの研究プロジェクトを設ける。</p>				

事業目的

1. 水都－基層構造…東京のユニークさの解明のために大地・自然と結びつく独特の基層構造に光を当てる。その基礎条件を解明することが本事業の基盤となる。特に江戸東京を最も特徴づける「水都」という視点を軸に研究を組み立てる。その研究成果をもとに、現代の東京を対象に、水資源・水環境の視座も取り入れつつ、文化的景観の価値を再発見し、江戸が誇る庭園文化の意味をも考えながら、実践的なアクションを展開する。水都としての東京のこれからをより豊かに持続させるための実践的な研究となる。

2. 江戸東京の「ユニークさ」…この基層構造の上にアイデンティティを形成していく江戸東京が示す特徴を、その前史もふまえて検討する。江戸東京は、自然を排除して人工的な空間を築く西欧型の都市とは異なる概念で形成され、和辻哲郎『風土』では東京が世界的に珍しい「病める都会」の例とされたが、西欧の都市モデルが色褪せた今、和辻の否定的な見方は逆に優れた特徴として注目される。都市の国際比較、広大な武蔵野を抱えた江戸東京の個性、名所・景観・名物等の諸資源、人口の構成や推移の問題の考察等によって、東京がいかにか「珍しい」かを今日の価値観で検討しなおし、その個性を世界に誇れる「ユニークさ」として学術的にとらえなおし、江戸東京のブランド化に繋げる。

3. テクノロジーとアート…現代東京の先進性をテクノロジーとアートを中心に、それが生まれる秘密を研究する。近代西洋においては科学技術の下に都市が形成され、アートもそれに沿って展開された。こうした西洋のアートを東京は忠実に学び導入したが、持ち前のレジリアンスによって、西洋のアートに自らを開きつつも日本らしさを絶えず生み出し続けている。例えばロボットですら極めて人間的に用いられている。こうしたユニークさを検証していく。江戸以来の歴史や自然がメタボリズムの内で息づいている現在の東京で、それを支える様々なアートの実態を、世界の他都市との比較も行いながら解明していく。

4. 都市東京の近未来…江戸から繋がる西洋文明以外の社会思想を背景とした東京という都市の研究を通じ、次世代の世界の都市のあり方に示唆を与えることを目的とする。〈現代都市〉は大量生産・大量消費を基調とする資本主義社会システムとともに、瞬く間に全世界に普及した都市類型である。東京はこの〈現代都市〉という都市類型に対応しながらも、江戸から繋がる文化的地理的基層をもつために、世界のなかでもユニークな都市形成を行った。本研究プロジェクトでは江戸東京という巨視的な視座をもって、西洋で発達した〈現代都市〉を乗り越える新しい都市の姿を描き出す。

こうしたこれまでの研究蓄積をふまえた「実践知」に即した研究こそ、江戸東京の真ん中、千代田区にメインキャンパスをもつ本学が掲げたビジョンに合致するものであり、江戸東京のブランド化や世界に向けた文化力を生み出すものと考えている。

【大学の将来ビジョン】

「自由を生き抜く実践知」を基本とした〈法政大学憲章〉を定め、自由を生き抜く市民を輩出し、世界における市民教育の拠点となり、基礎研究・実践的研究の成果により持続可能社会を創造することをビジョンに設定。そのもとに**5つの教育の目標**「①(3つの)キャンパスの有機的連環を基盤にした総合大学になる」「②充実した『学び』を約束する市民教育の拠点になる」「③地域の多様性が有する価値を熟知しつつ、グローバルに思考する能力を育てる」「④持続可能な地域社会の構築を目指す教育の拠点になる」「⑤世界中の人々が日本を総合的に学ぶ場となる」を、**5つの研究の目標**「①持続可能な地域社会の構築を目指す研究の世界的拠点となる」「②国際的評価を有するユニークな研究拠点のさらなる発展を図る」「③持続可能な地球社会の構築に貢献する基礎研究に力を入れる」「④実践知を生かした応用研究分野で世界を牽引する」「⑤課題解決の研究拠点から有為な研究者を輩出する」を、またそれらをふまえた**社会貢献の実現**を標榜し、HP等で公開・周知している。

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

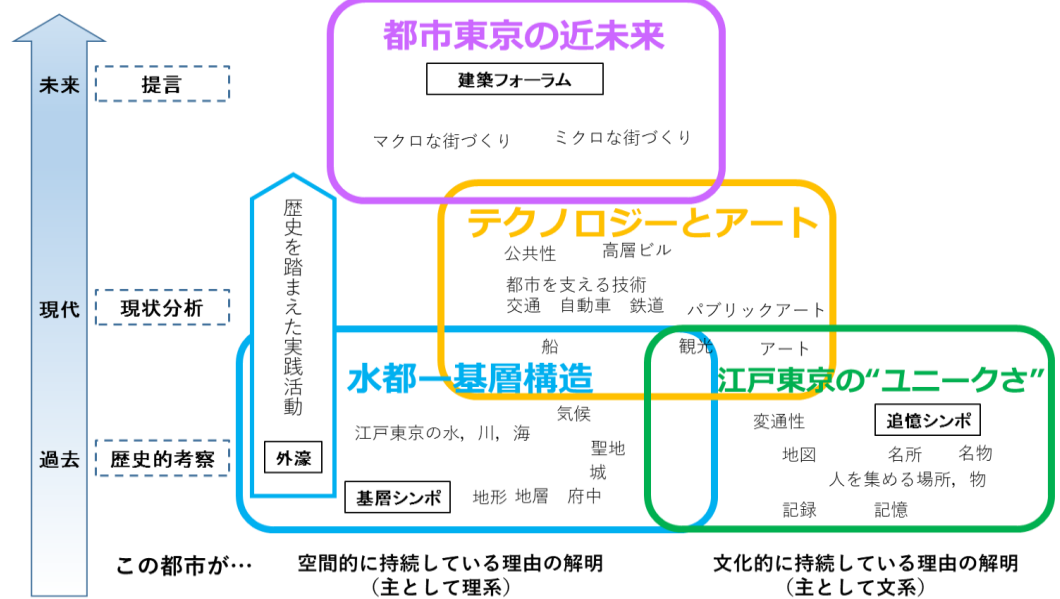
学校法人番号	131085	学校法人名	法政大学
大学名	法政大学		
事業名	江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成		

江戸東京研究センター〔略称 EToS〕は「持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた都市の未来を考えるために新・江戸東京研究に挑戦する」をマニフェストとして、江戸東京が過去から現代まで持続してきた理由を明らかにするとともに、未来の都市のあるべき姿を提言することを目標に活動を行ってきた。文系と理系の研究者が連携し、組織全体で関わる大型事業をすすめると同時に、参加メンバーの専門分野を生かすべく4つの研究プロジェクトによる研究を推進した。

大型事業をすすめるうえでは、江戸（歴史的過去）と現代ならびに未来の東京を連続的にとらえるテーマ設定のもと、一般市民が参加可能な特別講演会や国際シンポジウムを最低年に2度開催し、その成果をすみやかに出版物にすることを目標とした。2017年度は大型シンポジウム「江戸東京の基層/古代・中世の原風景を再考する」「新・江戸東京研究—近代を相対化する都市の未来」を開催した。後者はアメリカ、イタリア、フランスから研究者を招聘し大々的な成果を上げることができ、「EToS叢書1」として法政大学出版局より出版した。2018年度は大型事業は田中優子総長のリーダーシップのもと、特別対談企画「日本問答・江戸問答」とシンポジウム「江戸から未来へ アバター for ダイバーシティ」を開催し、後者は既に書籍として刊行、前者も出版準備中である。また、国際シンポジウム「風土(FUDO)から江戸東京へ」を行い、「EToS叢書2」として書籍化した。さらに、法政大学建築学科の協力のもと、南カリフォルニア建築大学・トリノ工科大学の学生・研究者を招いた約一週間にわたる国際ワークショップを開催し、その内容をまとめた書籍「江戸東京の都市組織に挑む」を発刊した。2019年度は、「磯崎新特別講演会 東京は首都たりうるか」、イタリアのカ・フォスカリー大学との共催シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネチア 過去の記憶と未来の展望」を実施し、後者は「EToS叢書3」として出版準備中である。

大型事業の他、文系・理系の研究者が江戸東京の過去・現在・未来に切り込むための4つの研究プロジェクトを推進している。「水都—基礎構造」プロジェクトは、江戸東京の古代から現在に至る地形や河川など自然環境に着目し、「テリトリーオ」という概念を導入し、水の都としての江戸東京の歴史を明らかにする。「江戸東京のユニークさ」プロジェクトは、江戸東京の名所研究から都市の個性を明らかにするとともに、新しいデジタル地図の作成を行っている。「テクノロジーとアート」プロジェクトは、「都市を支える技術」「パブリックアート」等、従来の江戸東京研究ではあまりなかった視点から見える東京のテーマにアプローチしている。「都市東京の近未来」プロジェクトは、主に建築学の研究者を中心に「生活空間としての住宅地域」に注目し、実践的なまちづくりを視野に入れ、東京の理想的な未来像を提示すべく活動している。

EToS研究活動マップ



【マニフェスト】 持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた都市の未来を考えるために、私たちは新・江戸東京研究に挑戦します。

江戸東京は過去から現代まで持続してきた都市である (歴史的事実)
それをふまえ、これからもよい形で持続してほしい →→→ (提言)

事業成果

社会に対する発信においては、ほとんどすべての研究会・シンポジウムを一般市民に公開したほか、一般市民を対象とした出版物も発刊した（MOOK本「大江戸の都市力」、雑誌「東京人」外濠特集への寄稿等）。玉川源流プロジェクトの活動経過の公開においてはYouTubeも活用し、より幅広い媒体での発信を心掛けた。また、大学近隣の外濠近傍の住民や学校、企業とともに外濠に関する共通認識をはかる「外濠市民塾」、神田明神での連続市民講座（江戸東京文化講座）、社会人向けの教育プログラム（履修証明プログラム「江戸東京を学ぶ」）なども実施した。研究活動の成果を元に、他大学との連名で東京都知事に対する政策提言（「外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生に関する提言」）も行い、この結果、東京都が2019年12月にまとめた「『未来の東京』戦略ビジョン」には、外濠などの水辺空間の活用や外濠浄化プロジェクトなどが盛り込まれるに至った。

在学生に向けた発信では、中高大連携学習プログラム「江戸東京チャレンジ」を開催したほか、保護者や在学生を対象とした広報誌の巻頭特集に研究センターの活動報告を毎年度掲載した。受験生に対しては、受験生向け大学案内の巻頭特集において、法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」の一例としてセンターの研究活動および外濠市民塾の活動を掲載した。

江戸東京研究には学外の他機関との連携が必須であることから、国内の大学（産業技術大学院大学、東京工業大学、東京理科大学、横浜国立大学、青山学院大学、中央大学等）や研究機関（東京文化資源会議等）、海外の大学（カ・フォスカーリ大学、トリノ工科大学、南カリフォルニア建築大学等）との連携活動を行っている。既に29名の外国人研究者に研究協力を仰ぎ、ともに活動をしている。また、博物館や美術館（府中市郷土の森博物館、東京都現代美術館、森美術館等）や自治体・市民組織・企業（神楽坂文化振興倶楽部、富士見地区町会、KADOKAWA）とも協力関係を作り上げている。

2017年度から2019年度までの実績は以下の通りである。なお、文部科学省からの助成が打ち切られるとの通知を受けた後、事業計画を大幅に修正しながら事業を推進したが、2019年度もほぼ当初の目標どおりの成果をあげられ、なおかつ次年度以降の調査研究活動の継続準備をすることができた。

■江戸東京研究センターの主な実績

	研究会 シンポジウム 開催回数		研究会 シンポジウム 参加者数 (のべ)	書籍発刊		報告書 発行	論文		作品	学会発表	
	(内) 国際シ ンポジウム・ 研究会			(内) EToS編 著書籍			(内) 査読付論 文			(内) 招待講 演・国際 学会	
2017年度	6	3	1054人								
2018年度	35	3	3865人	31	4	8	39	7	5	45	11
2019年度	36	5	2876人								

■江戸東京研究センター編著の書籍(市販)

【EToS叢書1】新・江戸東京研究—近代を相対化する都市の未来	法政大学出版局
【EToS叢書2】風土(Fudo)から江戸東京へ	法政大学出版局
歴史REAL 大江戸の都市力	洋泉社
江戸東京の都市組織に挑む 上野・本郷・谷中・根津・下谷	彰国社
好古趣味の歴史 ※2019年度制作、2020年6月発刊	文学通信

■報告書

風土(FUDO)から江戸東京へ	安孫子信 編
アートと東京／文学と東京	安孫子信 編
復元 江戸城能舞台と弘化勸進能	高村雅彦監修＋高村研究室
東京発掘プロジェクト 水辺編 I	高村雅彦 皆川典久 監修
江戸東京チャレンジ2018	江戸東京研究センター
テクノロジーと東京	山本真鳥 編
「江戸東京」という都市組織の中で「ヴォイドタイポロジー」の試み	北山恒 編
シンポジウム「地域から外濠の再生を考える」報告書	江戸東京研究センター・外濠再生懇談会他

■制作物

映像「玉川源流物語」	江戸東京研究センター水都府中プロジェクト
武蔵玉川絵図	神谷 博 編

(事業経費について)

ブランディング事業経費は、叢書・報告書等の制作費、研究・調査・学会発表のための旅費、研究成果データベース化のためのワークステーション購入費、シンポジウム・研究会等の開催費、webサイト運用費、研究補助者及びリサーチアシスタントの件費などとして活用した。

**今後の事業成果の
活用・展開**

法政大学江戸東京研究センターは、上記の事業成果にまとめられているように、採択を受けてからの実質2年半にわたって実に積極的な活動を続けてきた。4つのプロジェクトを柱に、持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた都市の未来を考えるための新・江戸東京研究を法政大学のブランドとして位置づけ、成果を発信し、社会においてその認知を推し進めることに、この短期間でほぼ成功したと言ってもいいだろう。国内の他の大学や研究機関、また行政、市民とも連携しつつ、多様なネットワークを生かした研究、発信、貢献が着実に成し遂げられたのである。

こうした実績をベースに、成果を積極的に活用して、今後もブランディング事業を大きく展開していく。文部科学省より2019年度をもって事業を中止するという突如の発表があったが、これまでの積極的な活動が評価され、少なくとも2021年度までは研究センターを存続させ、それに関わる研究活動を継続することが学内で認められている。

そこで、2020年度はさらなる飛躍の年として、2021年度に大きなまとめを実施し、2022年度以降も学内外で研究の継続が認められる組織体につなげていきたい。まず本学におけるブランディングをよりいっそう推進するための一つの戦略としてそのターゲットの重点を国内から国外へと広げるため、「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」をしばらくの目標としたい。すでに実施した2020年1月のヴェネチアでの国際シンポジウムに続き、2020年度から2021年度にかけて日中韓を主体とするアジア国際シンポジウムや交流イベントを複数開催し、国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究内容を世界に向けて発信していく。すでに29名の外国人研究者を招聘し、シンポジウムや書籍の刊行を通して綿密なネットワークを作り出している。それを十分かつ積極的に生かすことができる環境が当センターには整っている。

こうして国内から国外へと江戸東京研究のネットワークを広げ、それを重要なブランディング戦略として位置づけ、著書や報告書等による成果の公表に重きを置くことで、ブランドの認知をさらに推し進めようとするものである。そして、今後も本学の研究をより深化させ情報発信を進めるとともに、行政や市民のみならず、大学間の連携をさらに強化していく。国内外を問わずあらゆる機会・媒体を通じて社会全体に法政大学の江戸東京研究を積極的に発信し広く認知度を高めていく所存である。

以上